

## 開店十周年記念招待旅行

昭和三十一年六月、村上電機ラジオ店を開業した。次男二郎が生まれた年だった。

この土地は私が大洋漁業で乗船していたとき、なかと父が相談して買った。近くの国立病院は陸軍病院。グラウンド、野球場のある土地は、戦時中は陸軍騎兵隊の練兵場だった、私達が引つ越して来た頃の病院は木造平屋のお粗末な建物で、練兵場は草ボーボーでアベックの憩いの場所だった。

元魚屋だった店を改造し宇野電気社長に世話になり、開店したが、簡単に生計立つような売り上げは無い。その当時はまだ家庭電化が進まない時代だ。国立病院の入院患者に鉱石ラジオを作り売った。問屋の宇野電気に注文すると、自転車で配達にくる。その時代主流だった白黒十四インチテレビ等は、五〇〇〇のバイクで配達した事があった。

生活の足しにと、店の一部を、タクシーの運転手で子供の居ない今野さんに貸した。夏は氷水、秋から団子や回転焼き等売っていた。狭い店なのに、繁盛する。年末には回転焼きは行列が出来る程売れている。

家電製品 販売修理だけでは生活出来ない。私の故郷で電気工事をしている人にアドバイスを受け、電気工事を始めた。商才の無い私は、電気工事が向いて居るのか、体を張って仕事をするのが楽しい。電力に出す書類等は、知り合いになった工事屋さんの名義を借りて出した。その後何年か経って、工事組合に入り、東北電力の承認を受けた。

貸していた店は、今野さんが体の不調で二年余りで止める事になり、器財一式を譲り受け、喫茶店として我が家で営業する事になった。電気屋と喫茶店は相性が良いのだそうだ。保健所の許可を受け、店を引き継

いだ、

妻は朝早く起き小豆を煮て餡を作り、ゴマ、ズンダ、醤油餡等を作り、ダンゴを仕入れに行く。子供の世話をしなければ為らない。私が出掛けて居れば。電気店のお客さんの相手もしなければならぬ。夏の氷水は手回し機械で体力を必要だ、妻は本当に頑張った。

洋一と二郎は友達を連れてくる、美味しい食べ物がある。妻は惜しげなく食べさせていた。子供達の親に会つと、「うちの子供は電気屋さんに行くのが楽しいと云って居ます」と言われるという。儲けが少なくなるが喜んで居た。

東北高校の陸上部の生徒が毎日放課後、グラウンドに練習に来る、八畳間に、カバンを置き、着替え、パンと牛乳で腹ごしらえ、練習に行く。自由に取って食べるが金銭的には間違いは一度も無かった。この時の陸上部からオリンピック選手が何人もでて、妻が「お世話になったおばちゃん」として新聞に出たこともあった。

昭和四十一年春開店十周年を迎えた。お得意さんも増え、商売も何とか軌道に乗った。日帰りの十周年記念招待旅行を行いたいと思ひ、二人で決め、毎日の様に遊びに来る、宮城野原駅員の太田さんの勧める国鉄バスで、鬼首高原荘に行くスケジュールを組んだ。主だった御得意さん全員で、楽に一台のバスに腰掛けて行ける人数に招待状を送った。

当日は好い天気で、全員揃って、店前に来た国鉄バスに乗り出発した。酒類、菓子類、バスでの余興の景品、記念品等、多めに用意し積み込んだ。

弟の泰ちゃんも国鉄の車掌さんだ。上野と青森間の急行列車に乗務している、運よく休みだったので、接待係をお願いした。バスには女車掌

さんも来たが、泰チャンが往復面白い話を殆どバス車掌さんに、喋らせず聞かせてくれた。御得意さんは往復笑いどっしだった。

途中鳴子ダムで下車、沢山写真を撮り、鬼首高原荘に到着。弟子の康則が、ダットサンピックアップで持って行った仙台山形肉屋さん特製の折箱や酒類、ジューズで乾杯、私の挨拶後、昼食、記念写真を撮り、後自由行動にした。間欠泉で写真を写し、付近を散策、ゆっくりして、帰途に就いた。

帰りも泰チャンの司会で、のど自慢、賞品がでた。一番下手な人には一等賞よりよい「バットウ賞」がでた。泰チャンの面白く、すてきな話は尽きる事がない。

夕方無事、店前に着き皆さんに「こんな楽しい旅行は生まれて初めてです」と感謝され、解散した。

その時の写真が多く残っている。あの人、この人、懐かしい顔がいっぱい、私達二人の人生で忘れえぬ一齣だ。



平成十四年八月二十六日